

## ヘルダーとカントにおける啓蒙主義と絶対主義

村上隆夫

思えば悲しい星回りと言えるかもしれない。ヘルダーがかつての師であったカントに激しい批判を浴びせる羽目になったとは。一七四四年に東プロイセンの小都市モールンゲンに生まれたヨハン・ゴットフリート・ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) は、一七六二年から六四年までケーニヒスベルクでカントの教えを受けた。カントはこの弟子を愛し、自分の全ての講義を無料で聴講させたと伝えられている。ヘルダーはこの時期の思い出を大切にして、晩年になるまでカントを尊敬しつづけた。それは、彼が一七九六年に出版した『人間性推進のための書簡』(Briefe zur Beförderung der Humanität) 第七集からも明らかに見てとれる。<sup>(1)</sup>しかし一七九九年になると彼は『悟性と経験 純粹理性批判へのメタクリティーク』(Verstand und Erfahrung Eine Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft) を出版して、カントの『純粹理性批判』に果敢な突撃をかけることになった。<sup>(2)</sup>二回目の突撃は翌年の一八〇〇年に行なわれた。この年に出版された『カリゴネ』(Kalligone) は、カントの『判断力批判』に目標を定めたものであった。しかし彼のこれらの努力も所期の目的を達することなく失敗したというのが、大方の一致した意見となっている。<sup>(3)</sup>これら晩年の諸著作は、ヘルダーの最盛期を飾った作品にみられる比喩の巧みさや柔軟で精彩ある文体を欠いてゐる。そして何よりもまずこれらの著作は、ヘルダーがこれまでに築き上げてきた哲学的立場をただカントの立場にぶつけているだけであって、論争はすれちがいに終わっている。真に有効な論争を可能にするほど共通なものを両者は持っていないのではないか、という印象をこれらの書物は与える。したがってヘルダーとカントとの論争の核心が何であったかは、この二つの著作だけからは明らかに浮かび上がってはこない。そのためにはヘルダーの他の著作に眼を向けることが必要になってくる。

カントとヘルダーは一七六八年に一回だけ書簡を交換している。カントは五月七日付の書簡で、四年前にリガへ去った教え子の名声を誇りに思いつつ、次のように語りかけている。「私は、あなたの最近の企てが世間で獲ち得た紛れもない拍手喝采に多少の自惚れをもって加わりました。もちろんそれは、もっぱらあなた自身の地盤から生じたもので、あなたが私の許で進んで受けられた指示のおかげでは決してないのです<sup>(4)</sup>」これに対する同年十一月のヘルダーの返書は、カントへの感謝の念に満ちてはいるが、他方で恩師との離反がそう遠くないことを示している。この意味でヘルダーのこの書簡は、われわれの主題にとって欠くことのできない手がかりを与える<sup>(5)</sup>。

さて先の書簡でカントはヘルダーの活動領域を示唆しているが、それはモンテーニュからヒュームに到る経験論ないし懐疑論の伝統に連なるものであった。つまりカントは、ヘルダーが経験的世界の冷静な分析と記述を進めて、ハイマンゆずりの神秘主義と熱狂を薄めることを期待していた<sup>(6)</sup>。「私は、あなたの天才のこの時代を、あなたについて私が確信をもって知っているものから期待しています。すなわちそれはひとつの心の状態であって、それを所有している人と世間にとって全てのものうちで最も有益なものです。そしてそこではモンテーニュが最も低い位置を占め、さらに私の知るかぎりでは、ヒュームが最も高い位置を占めています<sup>(7)</sup>」これに対してヘルダーは自らの心の状態を次のように述べている。「……私はまだルソーに夢中だったので、ヒュームはあまり好きになれませんでした。ただ、どのようなかたちであるにせよ人間は畢竟社会的な動物だということに、私は徐々に気付いてきました。——その時から私はこの人物も評価できるようにになりました。彼は本来の意味において人間社会の哲学者と名づけることができず<sup>(8)</sup>」ヒュームとルソーの立場の相違がどのようなものであるにせよ、とにかく彼らは一つの点で一致していた。つまり彼らほどちらも、ホッブズの悲観的な人間論に対する反対者であった。彼らにあっては、そもそも人間は人間にとって狼ではなかったし、人間を社会へと結びつけるものは、死の恐怖ではなかった<sup>(9)</sup>。そしてヘルダーもまたこのことを深く確信しており、彼の信念は生涯変らなかつた。カントは彼の手紙のなかで、さらに自分がいま道徳の形而上学に取り組んでいることを告げているが、この分野についてヘルダーはカントをはっきりと批判している。「あなたの哲学的な仮説と証明の多くに対する疑念は、とりわけあなたが人間的なるもの学に触れているところでは、思弁以上のものです。私が私の精神的な使命を引き受けたのは、他ならぬ次のような理由からでした。つまり我々の市民体制の状態にしたがえばここから文化と人間悟性は、我々が国民と呼んでいる人間の高貴なる部分に最もよくもたらされるのです。私はこのことを知り、またこのことを経験から日々にもますます学んでいます。したがってこの人間の哲学はまた私の最も愛する仕事でもありま

す。<sup>(10)</sup>」ヘルダーとカントの対立は、この人間と社会の問題を軸として展開していく。ここが彼らの会戦の主戦場となった。<sup>(11)</sup> もっと詳しく言うならば、彼らの対立は、一八世紀のドイツにおいて啓蒙主義をいかに貫徹するかという政治的な問題を廻って行なわれた。カントは啓蒙主義への固い信念を捨てたことはなかったし、またヒュームとルソーから強く影響を受けた。しかしそれにもかかわらず、人間は人間にとって狼であるという彼のホッブズのな人間観は揺らぐことはなかった。『メタクリティク』と『カリゴネ』の出版に先立って行なわれたこの方面の論争に歴史的展望を与えることを以下の論述は目ざしている。

ヘルダーは彼の畢生の大作『人類史の哲学の構想』(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit) を一七八四年から九一年にかけて出版した。その第一部が出版されると、カントはそれに対抗して『世界市民的見地における一般歴史考』(Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht) を一七八四年に出版して自らの歴史哲学を展開した。この小冊子に反論するためにヘルダーは一七八五年に出版された『人類史の哲学の構想』第二部において、自らの人間観と政治哲学を披露した。

ヘルダーはここでホッブズに対する批判を行なっている。「かつて一群の哲学者たちがいて、彼らは、自己保存の衝動の故に我々の種を荒々しい獣どもの下位に置き、この種の自然状態を戦争状態とした。このような主張のうちには明らかに非本来的なものが沢山ある。<sup>(12)</sup>」人間が人間にとつて狼であるという説は、彼にとつては幻想にすぎない。人間は本来的に社会的な動物であつて、自然状態には穏やかな平和が支配している。人間性はもともと平和を好む。「したがつて戦争ではなく、平和こそ窮迫せざる人類の自然状態である。<sup>(13)</sup>」ヘルダーは、共同体における人間相互間の愛情の重要性を強調する。愛情にもとづく人間関係のなかではじめて人間は人間となることが出来る。「愛の懷に抱かれ、愛の乳房をしゃぶりながら、人間は人間によつて教育される。そして人間は彼らから多くのよきものを無償で受けとる。こうしてこのかぎりでは人間は現実に社会のなかで、社会へと形成される。社会がなければ人間は現われることはできないし、人間になることもできない。<sup>(14)</sup>」さらに慈しみの女神である自然が、万人の万人に対する戦いを防ぐ手だてを与える。「自然が、その力の及ぶ限り、ここでもまた自己保存という大法則を十分に制限して、万人の万人に対する戦いを防ぐ手段として何を考案したかみてみよう。<sup>(15)</sup>」まず自然は、人間の素質や感性や衝動を驚くほど多様なものにして、彼らの利害の衝突を防ぐ。第二に自然は、人間同士がぶつかる必要のないように広大な生活空間を提供する。第三に自然は、人間が速

やかに成長して親の家から独立するよう促す<sup>(16)</sup>。こうして様々な個人が様々な場所に散らばり、様々な諸民族が様々な地方に散らばる。広大で無限の変化に富んだ自然が、ホッブズの言うような争いを吸収してしまふ。

この前提から出発して、ヘルダーは近代国家リヴァイアサンを批判する。「したがっていかにして人間が国家に適合させられねばならないのか、また国家を組織することから必然的に人間の最初の真の幸福が生ずるといふことは、ますますもって理解できない<sup>(17)</sup>。」国家を持たずに幸福に暮らしている諸民族は沢山いる。「父と母、夫と妻、子供と兄弟、友人と人間——これらは自然の諸関係であつて、それによって我々は幸福になる。国家が我々に与えられるのは人工の材料である。しかし残念ながら国家は遙かにより本質的なもの、我々自身を奪い去つてしまふ<sup>(18)</sup>。」ホッブズは彼のリヴァイアサンを、自然法という抽象的原理にしたがつて構成され、君主の意のままに動く巨大な自動機械として表象した<sup>(19)</sup>。ヘルダーはルソーに倣つて幸福な未開人をこの近代国家に対置する。ルソーと同じく彼もまた、一七世紀に確立されたこのような絶対主義國家を憎む。「全ての國家論者たちが述べているように、よく組織された國家というものは、ただ一人の人間の思考が統治する機械でなければならぬ。したがつてこの機械のなかでは、思考を欠いた部品として奉仕する以上の幸福が認められうるだらうか<sup>(20)</sup>。」このような非人間的な怪物によつて、ヨーロッパのみならず全世界は覆い尽くされようとしている。そしてこの動きを阻むものは、ヘルダーによれば再び自然の多様性に他ならない。したがつてヘルダーの有名な風土論は、反絶対主義という明白な政治的意味を担わされている。「自然は、森林と山々、海と砂漠、大河と気候によつて諸民族を驚くほど分割したばかりでなく、さらに殊に言語と性向と性格によつて諸民族を分割した。ただこうすることによつて自然は、人々を頸木につなぐ専制主義の仕事をやりにくくし、世界の全ての場所を木馬の胴体のなかに押し込みはしなかつた<sup>(21)</sup>。」

ひとつの命題がカントとの間に鋭い対立を構成する。カントは『世界市民的見地における一般歴史考』の第七講で次のように述べている。「人間は他の同類のなかで暮している時には主人を必要とする動物である<sup>(22)</sup>。」ヘルダーはすぐさまこの言葉をとらえる。「人間は主人を必要とし、この主人から、あるいは彼らの結合から彼の最終使命である幸福を期待する。これは人類史の哲学にとつて、たしかに手輕ではあるが、悪しき原則である。この命題を逆さまにせよ。すなわち主人を必要とする人間は隙である。彼が人間になるや否や、彼はいかなる本来的な主人ももはや必要としない<sup>(23)</sup>。」ごく大雑把に言えば、ヘルダーの人間観は一八世紀の啓蒙主義に一致しており、カントの人間観は一七世紀的ホッブズ的だといえる<sup>(24)</sup>。カントにとつては「人間は非常に振れた材木から作られており、それから完全に真直ぐな材木を作ることではできない<sup>(25)</sup>。」万

人の万人に対する戦いの状態からいかにして平和な法治状態が生じてくるのか、このことを示すのがカントの歴史哲学の課題となる。実践理性の道徳法則に対する変わることなき信念にもかかわらず、カントにとって歴史とは人間の善なる意志によって進展するものではない。それ故に「人間たちのふるまいが大きな世界の舞台にくりひろげられるのをみると、ひとは少し不気嫌にならざるをえない。」<sup>(29)</sup>しかし敵意や欲望や野心や利己心といった悪しき情熱から偉大な結果がもたらされる。ホッブズの場合と同じように、混乱が平和をもたらし、悪が善を可能にする。

「個々の主体においては混乱し無秩序にみえるものが、それにもかかわらず類全体においては、彼らの本来的な素質の緩慢ではあるが確実に前進する発展として認識される」<sup>(27)</sup>人間は人間にとって狼であるという現実から出発してはじめて、理性的原理はこの世に実現される。「自然が人類の全ての素質を發展させるために用いる手段は、社会におけるこれらの素質の敵対関係である。しかしこの敵対関係が結局は社会の合法的秩序の原因となる。」<sup>(28)</sup>カントにとって歴史とは、人間の振くれた本性から理性が自ずと実現されてくる逆説的な過程に他ならない。

カントは狼としての人間から出発する。それ故に彼にとっては、絶対的な権力を確立することによって平和な法治状態を創り出すことが歴史の目標となる。人間の幸福は、彼自身の邪悪な人間性を完全に抑圧しうる強大な国家権力の枠組みのなかでのみ実現される。「自由が外的な法のもとで無敵の権力と最高度に結びつけられて現われる社会、すなわち完全に正しい市民体制が、人類に対する自然の最高の課題でなければならぬ。」<sup>(29)</sup>これに対して国家に敵対するヘルダーにとっては、歴史の目標は個々の人間の幸福に帰着する。そしてこのような幸福は、国家権力の支配によっては保証されなければならず、むしろそれによって損なわれる。「かように摂理は思いやり深く企てられた。なぜなら摂理は巨大な社会の人工の最終目的よりも個々の人間のより手軽な幸福を優先させ、かの高価な国家機械を諸々の時代からできるだけ省いてやったからである。」<sup>(30)</sup>カントは一七八五年にヘルダーの『人類史の哲学の構想』第一部および第二部の書評を発表した。そのなかで彼はヘルダーのこの言葉をとらえて皮肉まじりに次のように問いかけている。「しかし著者氏は次のように考えているのだろうか。すなわち仮りにタヒチの幸福な住民が、文化の開けた諸民族に訪問されることもなく、静かな無気力のなかで何千年にもわたって生きていくよう定められているとする。その場合ひとは、一体なぜ彼らは存在しているのか、そしてこの島は幸福な羊や牛が住んでいるとしても、たんに楽しむだけの幸福な人間が住んでいるのと変りないのでないか、という問いに満足のいく答えが出せる。著者はそう考えているのだろうか。」<sup>(31)</sup>歴史の目標に関するこの対立からさらに歴史における進歩の観念についての対立があらわになる。カントによれば歴史とは、兇悪で暗黒の野蛮状態から啓蒙された社会への困難な前

進に他ならない。したがって先行する諸世代の努力は最後の世代の享受のためにある。この点でカントは仮借ないやり方で個体を切り捨て、類を前面に押し出す。「……ただ最後の世代だけがこの建物に住む幸福をもつのであって、彼らの先行者たちの長い系列は（たしかに意図せずにはあるが）この建物の建設に従事したが、彼らの準備したこの幸福に自ら加わることはできない。」<sup>(32)</sup>個々の人間は死に、ただ類だけが歴史の終局に辿りつくというカントのこのような進歩観に対してヘルダーは反論する。「例えば我々がここで知っているような人間が、その心的な諸力の無限の成長とその感覚および活動の前進的な拡大のために創られているということは、どういふことなのか。ましてや人間が、人類とその全ての世代の目標としての国家のために、本来的にはただ最後の世代のために創られており、この最後の世代は全ての先行する諸世代の幸福の崩れた足場の上に聳え立つということは、どういふことなのか。」<sup>(33)</sup>ヘルダーにとって歴史はカントのように直線的な進歩としては表象されない。冬になれば散り急ぐ花々の四季がそこで完結しているように、個々人の生涯も諸民族の興亡も、おのおのそれ自体で完結した全体をなしている。「我々の最も美しい心的諸力は、花開くと同じように、萎れるのではないか。いな、年月につれて、また状況につれて、それらは自ら入れ替わり、友情溢れる争いのうちに解消するか、あるいはむしろ回転する輪舞のなかに互いに解消するのではないか。」<sup>(34)</sup>歴史過程はたしかに連続しているが、その一つ一つの項はそれ自体で独立し完結した全体をなしている。この点において彼はライブニッツのモナド論を受け継いでいる。<sup>(35)</sup>

ヘルダーは一七七四年に『人間性の育成を旨とする歴史哲学別案』(Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit)を出版して、一八世紀の啓蒙主義を批判している。『人類史の哲学の理念』が啓蒙について倦むことなく語っているところから、この二つの歴史哲学の間に立場の相違をみる研究者たちがいる。<sup>(36)</sup>しかしまず第一に歴史の直線的な進歩を否定する点で両者は一致している。ヘルダーが一七七四年の著書で批判している啓蒙主義とは、一八世紀ヨーロッパ社会の揺るぎない自己確信であった。彼は、当時のヨーロッパが歴史の頂点に達しつつあり、また文明の唯一の型を示しているという自信に満ちた意識を揺さぶろうとする。「今やヨーロッパには、かつてあらゆる世界にあったよりも多くの徳があるというのか。そして何故に。そこにはより多く啓蒙があるから。私は次のように信ずる。まさにそれ故に徳はより少ないに違いないと。」<sup>(37)</sup>近代ヨーロッパ社会は世界の中心でもないし、歴史の最高の段階でもない。それは世界の片隅であり、歴史の一コマにすぎない。自然が示す多様性は、合理主義が振りかざす抽象的原理によって捉えきれぬものではない。歴史は、いたる所に入口をもち、いたる所

に出口をもち、あらゆる部分に中心をもつ、複雑きわまる迷宮に似ている。「もし汝にとって全体が迷宮であつて、百の門によって閉じられ、百の門によって開かれるとすれば、この迷宮は『神の宮殿』であつて、神によって全て満たさるべきものであり、恐らくは神が氣晴らしに眺めるものであつて、汝のためのものではない。」<sup>(38)</sup>彼は一八世紀ヨーロッパの栄光を徹底的に相対化し、偶然なものとする。「ある民族の形成と発展は運命の技以外の何物でもない。…この形成を若干の透明な理念のうちにおくとは何という氣狂い沙汰であるう。」<sup>(39)</sup>宗教的内乱は終結し、絶対主義國家の中央集権的な支配のもとでヨーロッパ社会はいま平和と繁栄を謳歌している。ヘルダーはルソーと同じように、このような状況のうち危機を読みとる。「我々全てが非常に満足し、全く満ち足りて幸福な臣下であるが故に、『いかなる内乱』もないのだからか。…我々全てが非常に魅力的な徳、ギリシャ人の自由やローマ人の愛国心や東洋人の敬虔さや騎士の誇りを全て最高度に持っているが故に、『いかなる悪徳』もないのか。あるいはそれはまさに、我々がこれら全ての一つも持つことができず、それ故に残念ながら彼らの一面的で分割された悪徳すら持ちえないからではないのか。か細い、グラグラ揺れる枝よ。」<sup>(40)</sup>こうしてこの作品は絶対主義國家のもとでの啓蒙と平和を疑問視している。

さらにまたどちらの作品においても、自然を支配しようとする近代的理性の野望に対して自然が警告する。絶対主義國家の枠組のなかで成長した市民階級の自己意識は、自らを自然と同一視して絶対主義國家に敵対した。<sup>(41)</sup>ヘルダーもこれにしたがう。「知識が詰りすぎた頭は、たとえそれが黄金の知識だとしても、身体を押し潰し、胸を狭め、視野を曇らせる。そしてこのような頭をもった人にとって生命への病んだ負担となる。」<sup>(42)</sup>一七八五年のヘルダーはこのように主張する。そしてこの主張は一七七四年の『歴史哲学別案』における次のような嘆きに連らなっている。「啓蒙！我々は今や非常に多くを知り、非常に多くを聞き、読んでいるので、非常に落着いて、忍耐強く、物腰柔らかになり、不活発である。―たしかに―たしかに―實際そのとおり―そしてそれ以上である。しかしこれら全てのことにもかかわらず我々の魂の根拠はいぜんとして非常に脆弱なままである。」<sup>(43)</sup>このようなヨーロッパ人に比べれば、海の彼方の新大陸の未開のインディアンの方が遙かに完全な人間性を体現している。「とらわれない自然人の眼は自然を見つめ、それと知らず自然の装束を見れば元氣を回復する。あるいはそれは仕事に際して働らき、年月の移り変わりを楽しむことによって、高齡になつても殆んど衰えない。耳は半可通の思想にまぎらわされたり、文字によって混乱させられたりせずに聞いたことを完全に聞き取る。…そして言葉というものは、それが一定の対象を指示しているときには、一連の聲の抽象よりも魂を満足させる。かくのごとく野蛮人は、感覚が彼に与える単純な満足に満ち足りて、しかも飽食することなく生きて死んでいく。」<sup>(44)</sup>ヘルダーにと

って近代国家は不気味な巨人機械であったが、この怪物は今やヨーロッパ大陸の空間を隙間なく占有し尽したばかりでなく、海の彼方にある無垢の自然を侵略しようとしている。この点においてヘルダーは再び風土論を手がかりにして、ヨーロッパ諸国の帝国主義政策を批判する。「…自然は人間がなしうる最良の仕事においてさえ、ある土地の栽培においてあまりに急激であまりに強引な植え変えを好まない。メキシコ、ペルー、ブラグワイ、ブラジルにおけるいわゆる文明化されたアメリカ人たちの脆弱さ。それはなかんづくひとが彼らにヨーロッパ的な自然を与えることもできず、また与えようとせず、彼らの土地と生活様式を変化させたところからもくるのではないか。」<sup>(45)</sup>人間自身が自然の一部であり、人間と彼をとり巻く自然環境とのつながりは宿命的といえるほど強い。経験や伝統から切り離された理性は、思いついて自らの諸原理にしたがって自然を意のままに支配しようとする。しかし、「自然はいたるところ生きた全体であって、穏やかに傳かれ改良されることはできない。それが、暴力的に支配されることはできない。」<sup>(46)</sup>こうしてヘルダーは、海洋の彼方でも絶対主義に敵対し、自然状態を擁護する。新大陸の発見と収奪は、絶対主義の興隆と不可分の関係をもっていた。かつての宗教戦争は、絶対主義国家によって国家間の戦争として植民地の空間に移された。ヨーロッパ国際法の整備とヴェストファリア条約以降の平和は、植民地獲得を目ざす帝国主義戦争によって補完されていた。<sup>(47)</sup>そしてヘルダーの歴史哲学は海洋を迂回して再び彼の生涯変らぬ敵に立ち帰る。すなわち絶対主義国家である。<sup>(48)</sup>

絶対主義国家は啓蒙主義の前提条件をなし、啓蒙主義は絶対主義国家が一七世紀を通じて確立した安定した秩序のなかで始めて展開した。そして啓蒙主義は絶対主義の敵対者としてその没落を準備した。<sup>(49)</sup>既にみたようにヘルダーは啓蒙主義に組して絶対主義を敵とする。これに対してカントは、絶対主義と啓蒙主義との弁証法的な関係そのものを自らの歴史哲学に組み込む。

カントは啓蒙主義者としての信念を決して隠そうとはしなかった。「現代はまことに批判の時代である。あらゆるものは批判に服さねばならない。」<sup>(50)</sup>彼は人間の理性を全能の裁判官に仕立てる。宗教、法律、制度、習慣などはことごとくこの理性の前に引き出され、自らの合理性を証明せねばならなくなる。この審判に耐えられないものは舞台から消えることになる。しかし彼は、啓蒙主義がこのように展開しうるための前提条件をまず要求する。このことは一七八五年の小論文『哲蒙とは何か?』(Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung) が明快に論じている。この論文は、カントがドイツの市民階級に与えた政治権力奪取のための綱領とみなされねばならない。カントは絶対君主に対して、啓

蒙への教会の妨害を排除するよう求める。君主は臣下が自らの理性によって行なう批判を擁護せねばならない。「彼が自らの国家において彼の自余の臣下たちに対する若干の压制者たちの精神的専制主義を支援するほどに彼の至高の権力を貶めるならば…彼の威厳そのものが損なわれる」<sup>(51)</sup>。絶対主義は宗教戦争を克服する過程で成立した。それ故に宗教的寛容は絶対主義の歴史的成果に属していた。もともとはホッブズの不可知論的國家論において承認された市民の内面的な自由から啓蒙主義は展開した<sup>(52)</sup>。カントはこの論理を意識的に捉える。人間は市民としては主権の命令に絶対的に服従せねばならない。しかし彼が「知識人としてそのような告示の不適切さに対して、あるいはその不公正さに対してさえ自分の意見を公けに表明しても、彼は市民の義務に反していない」<sup>(53)</sup>。こうして絶対君主は啓蒙のための空間を創出することができる。まさに君主のうちにて全ての権力が集中され、君主に対する一切の抵抗が排除され不可能とされているが故に、君主は思想の自由を保証できる。「…自ら啓蒙され、影に脅えず、しかし同時に公共の平和の保証としてよく訓練された大量の軍隊を意のままにするものだけが、自由國家の敢えて語りえないことを語ることができる。すなわち『好きなだけ好きなことについて議論せよ。ただ服従せよ』<sup>(54)</sup>と。」カントは絶対主義と啓蒙主義の弁証法に注意を集中する。絶対君主に服従することが啓蒙主義を推進させる条件となる。人間は人間にとって狼であるという原則から出発して、とにかく絶対主義を確立し、啓蒙主義の前提条件を確保せねばならない。この意味においてカントは、プロイセンのフリードリッヒ大王と同盟することをドイツ市民階級の政治的課題とする。絶対主義が教会や等族会議や封建的貴族を打破して始めて、市民社会は発展しうる。「この点においてこの時代は啓蒙の時代であり、あるいはフリードリッヒの世紀なのである」<sup>(55)</sup>。

したがってカントが市民の抵抗権を否定したのは、法的な見地からだけでなく歴史哲学的な見地からも当然の成り行きと言わねばならない。なぜなら絶対君主が保証している秩序を破壊することは啓蒙主義が展開するための基盤そのものを破壊してしまうことになる。したがって「國家の立法元首に対しては國民のいかなる合法的な抵抗もない。というのも彼の普遍的—立法的な意志に服することによってのみ法治状態は可能だからである」<sup>(56)</sup>。カントは内乱を最も恐れる。法治状態が確保されて始めて、啓蒙に向かう自由な討論が保証される。また同じ理由から「至高の権力の起源は、その下にいる人民にとって実践的な見地からは探求できない。…普遍的に立法する意志に服するという契約 (pactum subiectionis civilis) が現実的に事実として先行したのか。あるいは暴力が先行して法はようやく後になってやってきたのか。…このようなことは、現在すでに市民的な法の下にある人民にとっては全く無意味であり、しかも國家を危険にさらす詭弁である」<sup>(57)</sup>。どのような國家であれ、と

にかく現実には強力で安定した国家に服従し、実際に法治状態を享受せねばならない。理念としての社会契約にもとづく一般意志としての主権と現実の主権との乖離は、これから啓蒙によって埋めていけばよい。<sup>(58)</sup>

さらに国家間の問題についてもカントは絶対主義国家の効用を力を入れて主張する。ここでも国家間の敵対的な自然状態から平和なヨーロッパが期待される。「したがって自然は人間たちの仲の悪さ、さらにはこのような人間たちの巨大な社会および国家機構の仲の悪さを再び手段として用いて、それらの不可避的な敵対関係から平和と安全の状態を見出した。」<sup>(59)</sup>カントはここでも人々の善意志には期待をかけない。諸国家の敵対関係から湧き上がる戦争の恐怖だけが、諸国家を強制して国際平和を実現させる。内的に完結した国家空間を創出したヨーロッパの絶対主義諸国家の軍事的な睨み合いのうちに、カントは絶対主義の成果をみる。三十年戦争の苦しい経験をへて形づくられたヨーロッパの国家間秩序は、たしかに道徳的な原理にもとづくものではなく、マキャベリに始まる醒めた権力主義にもとづいていた。しかしこれによって始めて宗教的熱情から切り離された冷静な打算によって戦争を合理化することが可能となった。<sup>(60)</sup>巨大な機械たるリヴァイアサン相互の武装せる恐怖の均衡のうち、カントは真の国際平和への途を見出す。つまりこのような打算的な平和のもとで啓蒙はさらに促進されるようになる。戦争の準備として巨大な常備軍を編制し、これを維持するために産業を育成することが諸国家の至上命令となる。このために君主は人民をできるだけ速やかに啓蒙せざるをえなくなる。「今や諸国家はすでに互いに非常に不自然な関係にあるので、いかなる国家も国内の開発において事をなおざりにすれば、必ずや他国への力と影響力を喪失する。…さらにまた今や市民的自由に手を触れるならば、必ずやあらゆる産業において国家の不利益を痛感することになる。」<sup>(61)</sup>絶対主義は、その内在的論理によって否応なしに啓蒙を推進せざるをえない。そして啓蒙の浸透と市民階級の成長とともに真の永久平和が近づいてくる。ヘルダーとは対照的にカントはこうして絶対主義国家とそのヨーロッパ体制を積極的に擁護する。そして絶対主義の前提のもとで彼は来るべき市民階級の権力掌握という次の段階を展望する。一七八九年にフランスはこの段階を迎えた。

一八世紀に啓蒙主義が典型的に発展したフランスにおいては啓蒙主義は絶対主義を敵としていた。しかしこのような対立軸にしたがってカントの政治哲学を理解することはできない。彼にあっては、むしろ絶対主義から啓蒙主義に到る歴史的發展が視野に入れられる。啓蒙主義がやがては絶対主義と敵対するようになることをカントはよく理解している。ただ一八世紀のドイツは、絶対主義国家による国民統一をまだ成し遂げていない。このような状況にあっては、絶対君主と同盟することが市民階級にとって必要とされる。そのためにはホッブズ的な諸原則が容認さ

れねばならない。そのうえで始めて市民社会は国家権力へ向けて接近できるであろう。「しかしこの啓蒙と、そしてそれとともにまた啓蒙された人間が自ら完全に理解している善なる事柄について持たざるをえない一定の心情的共感とは、徐々に王冠まで上昇していき、支配者の統治原則に自ら影響を及ぼすに違いない。」<sup>(62)</sup>市民社会が充分に発展すれば、絶対君主制の欠陥が誰も眼にも白日の如く明らかになるような段階がやってくるであろう。そうなれば君主制が廃止され、共和制への移行が行なわれることを期待できる。「君主が退位させられるということは、…王位を自発的に放棄して、自らの権力を人民に返還するというかたちで捨て去ることとしても考えられるし、あるいはまた最高の人格を侵害することなしにこの人格の放棄がなされ、それが私的身分に移されることとしても考えられる。」<sup>(63)</sup>市民社会がやがて絶対主義を呑み込んでしまうであろう。

このようにみれば、絶対主義に賛同して抵抗権を否定するカントとフランス革命に共感するカントが完全に両立しうる理由が理解できる。たしかに革命はできるだけ避けねばならない。「(欠陥のある)体制を変えることは、たしかに時として必要となるかもしれないが、それはただ主権者自身によって改良を通じてのみ行なわれるのであって、人民によって、すなわち革命によって行なわれることはできない。」<sup>(64)</sup>この点においてカントは真剣だったと考えることができる。当時のフランスについても彼はこのように考えていたであろう。フランスの啓蒙主義者たちも、一七八九年に起こったような深刻な政治的対立を予想していた訳ではなかった。彼らの歴史哲学は彼ら自身の政治的意図を歴史の必然的な推移と同一視した。このことによって彼らは来るべき政治的対決の問題を意識から追い出した。<sup>(65)</sup>しかしフランス革命を自撃したカントは、否応なしに一步進んで革命そのものを理論化せざるをえなくなる。

君主の圧制に対して人民が反乱を起こすという事態は充分に予想できる。「人民にとって反乱は、いわゆる暴君 (non timio sed exercio) <sup>(66)</sup>の抑圧的な権力を投げ捨てる正当な手段であろうか。」人民の諸権利は侵害されており、退位させることによって暴君にはいかなる不正もなされない。このことは疑い余地がない。しかしそれにもかかわらず臣下にとってこのような仕方では彼らの権利を求めることは、最高度に不正である。そして彼らがこの争いで敗れて、その後そのために最も厳しい処罰に耐えねばならなくなったとしても、同じように不正を歎くことはできない。<sup>(66)</sup>その時々々の権力がそもそも合法性を定める。したがって反乱は、現体制のもとでは法的な意味では全く不正であって、これは状況の如何を問わない。しかし政治的には事柄は別の光のもとに現われる。ひとたび内乱が起これば、複数の権力がまさに合法性の独占を目ざし

て戦かう。主権者は、敵を打倒して法治状態を回復することによって主権者たることを証明せねばならない。<sup>(67)</sup>これに失敗すれば、これまでの支配者の権力とともに合法性も消滅する。したがってカントは続けて次のようにつけ加える。「もし人民にとって反乱が成功したならば、かの元首は臣下の位置に退かねばならず、失地回復のための反乱は始めないほうがよい。」<sup>(68)</sup>内乱という例外状況が過ぎ去り、再び新しい主権者によって秩序が回復されるならば、以前と全く同じ法的原则が新しい主権者に関して妥当せねばならない。内乱という特殊な空間は法秩序の解体を示しており、そこは法的な空白状態をなしている。<sup>(69)</sup>したがって内乱の前にあった体制と後に出現した体制のどちらを高く評価するかは、カントにとってもはや法的な問題ではなく、歴史哲学的な問題となる。

カントは一七九八年の『学部の争い』(Der Streit der Fakultäten)のなかでフランス革命への有名な弁護論を展開している。論議は法的ではなく、歴史哲学的に行なわれる。「今日我々が目のあたりにしている才気溢れる民族の革命は、…全ての傍観者の心のうちに、希望に応じた熱狂に近い共感を見出している。」<sup>(70)</sup>彼はその理由を二つ挙げる。まずこの革命は人民主権の原則を確立した。さらにこの革命は共和制を目ざしている。<sup>(71)</sup>実践理性の尺度にしたがって新しい体制はより合理的だと判定される。ともかくも革命が起こってしまった以上、歴史の目標に照らしてこれを判断する以外に判断の基準はない。そしてフランス革命は幸運にも歴史の目標に沿って推移したと彼は考える。

しかしカントはすぐさまフランスの状況とドイツの状況を明確に区別する。つまりドイツの人民にはいぜんとして絶対主義が要請されている。「なぜならヨーロッパにおけるこの人民の非常に拡散した状態は、強大な隣国の間でこの人民が生きていける唯一の体制としてこの体制を推すからである。」<sup>(72)</sup>歴史の歩みにしたがって、ドイツでもやがては啓蒙主義が勝利するに違いない。しかし当面は絶対主義が確立されねばならない。そしてドイツがやがて現在のフランスの段階に達した時、革命という自然力によってではなく、改革という意識的な活動によって絶対主義が消滅するのが最も望ましい、ということになる。とにかくドイツは「革命の現場から百マイル以上も遠方にあった。」<sup>(73)</sup>

カントの政治哲学は、歴史哲学的な展望を内部に組み込んで、二段構えの構造になっている。それは、一方ではホッブズのな諸原則にしたがって絶対主義の確立を目ざす。しかし他方ではそれは、絶対主義のもとで展開する市民社会がやがてはルソー的な諸原則にしたがって絶対主義を何らかのかたちで葬り去ることを展望している。彼の政治哲学は、精緻な複雑さと歴史の論理への透徹した洞察によって、巨匠の名に恥じな

い。これに比べるとヘルダーの政治思想は、遙かに平板な印象を与える。下世話に言えば、ヘルダーは、老獪で読みが深いカントに比較すると政治的な事柄にきわめて疎い。<sup>(74)</sup>

ヘルダーの政治思想は、先にみた『人類史の哲学の構想』第二部を中心に散見されるが、フランス革命に関わる彼の見解は、殊に一七九八年の『人間性推進のための書簡』第七集、および『人類史の哲学の構想』第二部第九篇への下書きにみられる。彼はロックやフランスの啓蒙主義者たちの言葉を殆んどそのまま繰り返す。カントとは異なつて、彼は絶対主義を端的に啓蒙主義の敵として捉える。「たしかにいかなる専制主義も、その頸木につながれている者を本当に啓蒙したり教育したりすることに進んで貢献することはない。<sup>(75)</sup>」絶対主義は啓蒙を妨害するものとみなされる。ヘルダーは、ドイツではなく、もっぱらフランスの絶対主義に眼を向けている。革命前夜のフランスの絶対主義は、公債の乱発による巨額の債務に苦しんでいた。国家財政の破綻が一七八九年の崩壊を準備した。<sup>(76)</sup>彼はルイ一六世治下のフランスを念頭に置きつつ、次のように続ける。「どうして彼が臣下を啓蒙したりするだろうか。また啓蒙できるだろうか。なぜなら彼自身が啓蒙されておらず、デタラメに行動しているのだから。諸君は國家の収入の計算の見通しをつけようとしているのか。収入はあった。しかしいかなる計算もない。諸君は支出を判断しようとしているのか。専制君主は支出を自分では判断しないし、彼の判断の欠除を諸君から判断することもないだろう。」<sup>(77)</sup>ヘルダーは崩壊しつつあるフランス絶対主義を目のあたりにしている。カントのように絶対主義は秩序を保証する要因としては理解されず、むしろ混乱と無秩序をもたらす要因として理解される。絶対君主は全ての権力を一身に集中するが、彼自らは國家の全ての政策に目配りすることはできない。したがって野心家や詐欺師や三百代言が國庫をほしほしに食い荒らし、その責任は全て絶対君主に帰せられることになる。「まともな人間ならば、愚者や悪人に彼の名前を譲り渡して、彼らが支配するようにするであろうか。そして専制國家においては國王の名前が、魂の抜けて腐敗した活動の迷路の全体と無秩序を覆い尽していないだろうか。」<sup>(78)</sup>

絶対主義國家の命運は尽きようとしている。生命のない機械からなる國家に対して、生きた人間が対立項として対置される。「したがって人間の諸力と國家の諸力とは永遠の衝突のうちであり、このことは不可避である。なぜなら國家の本質は、人々を犠牲にするこの矛盾にもとづいているのだから。」<sup>(79)</sup>カントにおいては内乱状態に対して國家が対置された。しかしヘルダーにおいては、生きた人間からなる市民社會が國家にかわるものとして現われる。人間は國家を形成するよう創られているのではなく、「市民社會に向けて創られている。そして我々の種の最も優

雅な花は市民社会において花開くのである。」<sup>(80)</sup>強力な国家権力を欠いたところに生ずるであろう厄災について、カントは肝に銘じていた。しかしヘルダーは、愚昧な君主の下で腐り果てた国家を取り除けば、平和と安定が確保されると考える。カントは抵抗権を否定したが、ヘルダーにあっては服従契約はいとも簡単に無効とされる。「もし我々の先祖がたとえ善意から我々に後見人を置いたとしても、この後見、すなわち未成年性が永続するというわずかな但し書きは、先祖のよき意図とそれに従うという我々の義務とを完全に解消してしまふ。」<sup>(81)</sup>

カントは、革命というものをどうしようもない自然の成行きと考えていた。その場合彼にとって死活問題だったのは、できるだけ早く秩序を回復し、自然状態の混乱を国家理性によって再び押え込むことだった。ヘルダーもまた革命を自然力の現われとみなす。しかし彼にとっては革命とは、天体の運行と同じように事態が一巡して元の状態に戻ることにして表象される。<sup>(82)</sup>「全てのものが解体するように、この機械も永続性も解体するであろう。そしてこれらの機械は、その没落の原因をいまずでに自らの内部に持っている。幸いにも人間性と国家とは一つのものではない。むしろかの古き人間性はその可能な形態を通過しなければならぬ。そしてその結果として、自然の抗し難い法則にしたがって、消耗させる昼の後に夜が訪れるように、自然もまた抑圧に抗して再び抬頭するのである。」<sup>(83)</sup>歴史は輪舞として現われる。人工的な絶対主義国家は崩壊し、平和な自然状態という振り出しに帰る。ただそれだけのことにすぎない。

フランス革命が勃発した時、ヘルダーはこの事件をもちろん歓迎する。それは正常な状態への復帰と見なされる。「フランスがいまとっており、またとりうるよりよい体制とは何か。それは非常に穩健な君主制だろうか。…あるいはフランスは、古い幻想から以前の名称にいかにかこだわっているようにも、意志に反して共和制に、すなわち万人の共同体に戻されねばならないのだろうか。このことが早く起これば起こるほどよいように、私にはおもわれる。」<sup>(84)</sup>さらに彼は、反革命干渉戦争と王制復古の危険を指摘し、干渉戦争への対決を正義の戦争と規定する。「それによって正しい正当な戦争の最初の例が与えられるだろう。」<sup>(85)</sup>しかしヘルダーは、カントのようにフランス革命に対して熱狂に近い共感を抱くことはない。カントの歴史哲学にしたがえば、ドイツもやがては革命後のフランスと同じ段階に到達することになる。したがってフランスでの出来事は、カントにとって他人事ではなかった。ところがヘルダーによれば「最後の審判の日に世界の諸民族が最後に一堂に会するまで、ドイツはフランスにはなろうとしないし、また『恐らく決して』ならないであろう。」<sup>(86)</sup>なぜならヘルダーの考えによればドイツは、フランスのように絶対主義を確立することはないからである。ドイツは、フランスのように絶対主義国家の国家理性によって自然と人間を抑圧することはないであ

ろう。だからこそ「我々は遙かな沖合での難破を安全な岸边から眺めるようにフランス革命を眺めることができるのである」<sup>(87)</sup>。フランスの啓蒙主義者たちに対するヘルダーの賛同は、見誤まりようがない。またフランス革命に対する彼の明らさまな讃辞は、友人ゲーテの悩みの種であった。しかしそれにもかかわらずヘルダーは一般に啓蒙主義者とはみなされてこなかった<sup>(88)</sup>。そしてその理由は、これまで述べてきたカントと彼との理論的な対立から明らかとなる。

ヘルダーは一七六四年にリガに移住したが、そこで彼はフリーメイソンに加入している。リガにおけるフリーメイソン支部は一七五〇年に設立された比較的新しい組織であった。彼はその後長い期間にわたってこの秘密結社の一員として熱心に活動した<sup>(89)</sup>。このことは一見するとヘルダーの啓蒙主義を確証する伝記的な事実のようにおもわれる。なぜなら一八世紀のヨーロッパにおいて、フリーメイソンは絶対主義に敵対する市民階級の啓蒙主義の拠点となっていたからである<sup>(90)</sup>。しかし次の点にも注意せねばならない。すなわち絶対君主に当時敵対していたのは、何も市民階級だけではなかった。封建的貴族階級もまた、市民階級よりも古くから王権と闘争を続けてきた。そして彼らのうちには、フリーメイソンの団員が多数いたのである。フリーメイソンを利用してルイ一六世に対する革命に火を点けた有名なオルレアン公ルイ・フィリップは自らは大貴族であった<sup>(91)</sup>。つまり市民階級と封建的貴族階級は、絶対君主という共通の敵に対しては同盟できたのであって、フリーメイソンは一面ではこの同盟の場を提供していた<sup>(92)</sup>。したがって反絶対主義を掲げてフリーメイソンで活動する時、ヘルダーは封建的反動勢力に結びつくことも可能だったのである。

一八世紀のドイツは、強力な絶対主義による国家統一を欠いていた。それに向かっていた動きは、フリードリッヒ大王のプロイセンを中心によりやく始まったばかりであった。このような状況のもとで、絶対主義に敵対する西ヨーロッパの啓蒙思想は、ドイツでは反動的な封建勢力によって利用された。国家権力の行使に一定の枠をはめる市民的自由の概念は、ドイツにおいては神聖ローマ皇帝に対する国王の権利として理解され、さらに国王に対する貴族の権利として理解された<sup>(93)</sup>。プロイセンにおいてフリードリッヒ大王の重商主義に反対して自由貿易を提唱し、アダム・スミスの受容を促進したのは貴族出身の官僚たちであった<sup>(94)</sup>。ホップズが抵抗権を否定して、絶対君主の統治する近代国家を確立しようとした際に念頭に置いていたのは、封建的貴族、教会、等族会議など封建的勢力の抵抗であった<sup>(95)</sup>。そしてドイツではこれらの諸勢力が、すでに絶対主義国家の統治の下に生きていた西ヨーロッパ市民階級の言葉を用いて、前進しつつある絶対主義の行手に立ち塞がった。カントは敢くまでも

絶対主権と近代国家の確立を希望する。これに対してヘルダーが啓蒙主義を掲げて絶対主義に敵対するとき、彼は一八世紀のドイツにおいては封建的諸勢力と同じ政治的方向をもって動いている。

ヘルダーとカントはどちらもヤヌスの二重の相貌をもって現われる。カントは二面を意識的に使い分ける。西ヨーロッパにおいて啓蒙主義は絶対主義を敵としていたが、カントは彼の歴史哲学において両者を結びつける。ドイツの市民階級は、まず絶対主義を確立して啓蒙主義のための条件を整えなければならない、と彼は考える。ヘルダーは西ヨーロッパの啓蒙主義者そのままに、啓蒙主義を標榜して絶対主義に反対する。こうして彼は、当時のドイツにおいては無意識に反動的役割を果たす。彼は、ドイツがフランス型の絶対主義を確立するのを阻止しようとする。彼の言うところにはがえは、ドイツはいつまでも近代国家による統一を欠いて、領邦と教会領と帝国領の入り交った中世的なモザイク模様止まる。彼は、啓蒙主義のための条件の欠けた所で啓蒙主義を要求し、そうすることによって当の条件そのものを阻止しようとする。プロイセンによる国民統一は後に悲劇的な結末を迎えたが、ドイツ人は少なくともこの方向にそって進むことを歴史の進歩とみなした。ヘルダーがカントと異なって反啓蒙主義者とみなされてきた原因はここにある。またソィヒテを廻って展開された無神論論争における彼の態度も、彼の反近代的精神を示唆している。<sup>(96)</sup>反啓蒙主義者ハーマンとの長い友情と同じように。

## 註

- (1) Cf. Johann Gottfried Herder, *Sämtliche Werke*, hrsg. v. B. Suphan, Bd. XVIII, S. 324 ff. 「彼の哲学は自分の頭で考えるということと呼び起こした。そして私は、彼の講義よりも精選されて有効なものを殆んど思い浮かべることができない。彼の思想は今まさに彼のうちに生じたように思われ、ひとは彼とともに思索を進めねばならなかった。口述筆記させたり、一方的に教えたり、独断的に主張したりすることを彼は知らなかった。自然史と自然学、人間の歴史と諸民族の歴史、数学と経験が彼のお気に入りの人知の源泉だった。そこから彼は知識を汲み出し、そこから全てのものを生かした。彼はそこに立ち帰った。すなわち彼の魂は社会のなかで生きていた。そして私は、彼が別れに当たってそのことについて語った友情溢れる言葉をまだ憶えている。」友よ。この男はイマニエール・カントという。彼の面影は私の前にある。」 *Ibid.*, S. 325.

- (2) カントと並んでケーニヒスベルクにおけるヘルダーの友人だったヨハン・ゲオルグ・ハーマン (Johann Georg Hamann, 1730-1788) は、一七九四年に『純粹理性批判』に対する批判の草稿をヘルダーに手渡した。ハーマンのこの小冊子『理性の純粹主義に関するメタクリティック』 (Metakritik über

den Purismus der Vernunft) がクルダーのこの著作に表題と基本思想を提供している。

- (3) テオドール・リットはクルダーのカント批判を雑駁だとしている。 Cf. Theodor Litt, Kant und Herder als Deuter der Geistigen Welt (Quelle & Meyer: 1930) S. 8-9. やむにカール・シーゲルも同じ意見を持っている。 Cf. Carl Siegel, Herder als Philosoph (J. G. Cotta'sche Buchhandlung Nachfolger: 1907) S. 99-103. これはルトレン・ハイムの基礎的なカント研究以来ほとんど繰り返されてきたことである。 Cf. Rudolf Haym, Herder nach seinen Leben und seinen Werken, Bd. II (Aufbau-Verlag: 1958) S. 711-12, 747.
- (4) Kant's Gesammelte Schriften, hrsg. Königlich Preussischen Akademie, Bd. X, S. 73.
- (5) この書簡の重要性については、ジャン・フェラーリが説明している。 Cf. Jean Ferrari, Herder et Jacobi, correspondants de Kant (Les Études Philosophiques, 1968, p. 197ff.)
- (6) 「あなたの才能は早い時期に解き放たれましたが、そこで私はより大きな満足をもって次のような時期を見やります。すなわちそこでは稔り豊かな精神はもはや若い感情の暖かい動きにあまり突き動かされず、穏やかだがしかし感受性に富んだ安定を獲得します。そしてこの安定は、いわば哲学者の願想の生活でもって、神秘家たちが夢みている生活のまさに正反対です。」 Kant's Gesammelte Schriften, a. a. O. Bd. X, S. 73-4.
- (7) Ibid., S. 74.
- (8) Ibid., S. 76.
- (9) ホッブズに対するヒュームの批判は、たとえば『人性論』第三篇第二節第三節にみられる。『人性論四』岩波文庫、六六頁以下。ルソーのホッブズ批判については、たとえば『人間不平等起源論』岩波文庫、六九頁以下を参照。
- (10) Kant's Gesammelte Schriften, a. a. O. Bd. X, S. 78.
- (11) この点については和辻哲郎が指摘している。『近代歴史哲学の先駆者—ヴォルフクルダー—』『和辻哲郎全集』第六卷、岩波書店、とくに四〇〇頁以下。
- (12) Herder, Sämtliche Werke, a. a. O. Bd. XIII, S. 319.
- (13) Ibid., S. 322.
- (14) Ibid., S. 320.
- (15) Ibid., S. 320.
- (16) Cf. ibid., S. 320-21.
- (17) Ibid., S. 340.
- (18) Ibid., S. 341.

- (19) 「国家は靈肉をそなえた総体であり、『人工人』 homo artificialis であるが、その総体が機械だとされた。それは人間の創作物であり、その素材 materia と技師 artifices、機械と設計者がともに人間であって、靈魂もまた人工的な機械の一部品と化す。」カール・シュミット『リヴァイアサン、近代国家の生成と挫折』(福村出版、一九七二年) 六四頁。
- (20) Herder, Ideen..., a. a. O. S. 340.
- (21) Ibid., S. 341.
- (22) Kant Werkausgabe hrsg. v. W. Weischedel (Suhrkamp: 1977) Bd. XI, S. 40.
- (23) Herder, Ideen..., a. a. O. S. 383.
- (24) 「大まかにいって、一八世紀に近づくにつれて、われわれは人生についての悲劇的な感覚と呼ばれてきているものの漸進的衰微に当面する。われわれはあまりにも長いこと、われわれはみじめな罪人であり、われわれには心の健康はないと言いつつ続けてきたと感じられた。われわれは、こうした調子をもっと快活な調子、洗練された、文明の時代によりふさわしいもの、に変えねばならないと感じられた。」バジル・ウィリー『十八世紀の自然思想』(みすず書房、一九七五年) 一一頁。
- (25) Kant, Idee..., a. a. O. S. 41.
- (26) Ibid., S. 34.
- (27) Ibid., S. 33.
- (28) Ibid., S. 37.
- (29) Ibid., S. 39.
- (30) Herder, Ideen..., a. a. O. S. 383.
- (31) Kant, Zu Johann Gottfried Herder: Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, Kant Werkausgabe, a. a. O. Bd. XII, S. 804.
- (32) Kant, Idee..., a. a. O. S. 37.
- (33) Herder, Ideen..., a. a. O. S. 338.
- (34) Ibid., S. 339.
- (35) ヘルダーはスピノザの思想を継承することを目ざし、ヤコービのスピノザ解釈を批判する対話篇『神 若干の対話』(Gott Einige Gespräche)を一七八七年に出版した。そこでの彼の努力は、一つにはスピノザをデカルトの影響から引き離し、ライプニッツによって修正することに向けられている。「ある存在者が、自ら所屬していると感じ、また常に完全に接続している全体を維持するために多くの生命と現実性を持つほど、すなわちより思慮深く、

より強力で、より完全なエネルギーを持つほど、その存在者はますます個体であり、ますます自我である。」Herder, *Samtliche Werke*, a. a. O. Bd. XVI, S. 575.

(36) たゞせば Carl Siegel a. a. O. S. 46-7. を参照。解釈上の諸問題については G. A. Wells, *Herder's Two Philosophies of History* (Journal of the History of Ideas, Vol. XXI, 1960) を参照。

(37) Herder, *Auch eine Philosophie...*, *Samtliche Werke*, a. a. O. Bd. V, S. 554.

(38) *Ibid.*, S. 561.

(39) *Ibid.*, S. 359.

(40) *Ibid.*, S. 556.

(41) ラインホルト・コゼンツックは、フベ・ライナルについて論じた際にこの点を指摘している。「海洋の彼方にある未開の地の自然的で無垢の王国は、これまで専制主義に対する間接的批判の大きな貯水池であったが、この王国が新しい社会の歴史的な役割を引き受ける。」Reinhart Koselleck, *Kritik und Krise Eine Studie zur Pathogenese der bürgerlichen Welt* (Suhrkamp: 1973) S. 148.

(42) Herder, *Ideen...*, a. a. O. S. 336.

(43) Herder, *Auch eine Philosophie...*, a. a. O. S. 555.

(44) Herder, *Ideen...*, a. a. O. S. 297-8.

(45) *Ibid.*, S. 287.

(46) *Ibid.*, S. 288.

(47) 「巨大な自由な諸空間の出現および新しい世界の陸地取得は、国家相互的な構造をもった新しいヨーロッパ的な国際法を可能にした。十六世紀から十九世紀末までと日付を記しうる国際法の国家相互的な時期において、一つの現実的な進歩が、すなわちヨーロッパの戦争を境界づけ限定することが、成就した。」カール・シュミット『大地のノモス(上)』(福村出版、一九七六年)一六八頁。

(48) さらにヘルダーの批判は東ヨーロッパにおける帝国主義政策にも向けられる。彼はバルト海沿岸におけるゲルマン民族の苛烈な植民政策を目のあたりにしてきた。「古いプロイセン人は殆んど完全に根絶やしにされ、クール人とラトビア人はこれに対して奴隷状態におかれた。彼らはその頸木のもつて今も苦しんでいる。それまでの長い残酷な戦争においてここで流された血を前にして人類は怖気をふるう。」Herder, *Ideen...*, Viertel Teil (1791), *Samtliche Werke*, a. a. O. Bd. XIV, S. 269-70. 有名なスラヴ民族興隆の予言もこの脈絡から理解されねばならない。「しかし移り行く時代の歯車は止まらない。そしてこれらの諸民族は、もし完全に耕作されそこから商業が拓かれるならば、ヨーロッパの最も美しい地域に大部分居住している。さらにヨーロッパにおい

て立法と政治は、好戦的精神にかわって諸民族の穏やかな勤勉と安定した相互交流をますます促進するにちがいない、また促進するであろう。それより他に考えようがない。したがって諸君たち非常に深くもの思いに沈んだ諸民族、かつて勤勉で幸福であった諸民族は、ついには諸君らの長い怠惰な眠りから揺り起こされ、諸君らの奴隷の鎖から解放されて、アドリア海からカルパチア山脈に到り、ドン川からモルダウ川に到る諸君らの美しい土地を財産として利用するであろう。そして落ち着いた勤勉と交易という諸君らの古い祝典をそこで執り行なうことができるだろう。」*Ibid.*, S. 279-80. 一九四五年の赤軍のヘルリン入城を予言するこの驚くべき文章は一七九一年に書かれている。ヘルダーのうちにスラヴ人の血が流れていたかどうかについては論争がある。

Cf. Emil Adler, *Herder und die deutsche Aufklärung* (Europa Verlag: 1968) S. 44.

- (49) 「啓蒙主義はまず最初は絶対主義の内的帰結として絶対主義から発展したが、その後は弁証法的な対立項および敵対者として絶対主義國家に対してその没落を準備した。」Reinhard Koselleck, a. a. O. S. 11.

(50) Kant, *Kritik der reinen Vernunft* (1781), AXI.

(51) Kant, *Was ist Aufklärung*, Kant Werkausgabe, a. a. O. Bd. XI, S. 59.

- (52) 「私と公、内面的信仰 (fides-faith) と信仰の表現 (confessio=confession) の区別の導入は、十八世紀に貫徹し、遂に自由主義的法治國・立憲國家に到達した。…ホッブズは：「内的信仰」には強制は及ばないとしている。…この留保こそ強力なレヴィアタンを内から破壊し、可死の神を止める死の萌芽となったのである。」カール・シュミット『リヴァイアサン』同上、九〇—九二頁。

- (53) Kant, *Was ist Aufklärung*, a. a. O. S. 56. カントはホッブズのように市民の秘かな内面的自由を保証するだけでなく、さらに自らの判断を公けに表明する権利を主張する。内面的領域は公共性へと拡大する。この点で彼はスピノザにしたがっている。「だから各人は自己自身の決定に依って行動する権利のみを放棄したのであって、思惟し判断する権利はさうではなかった。かくて何びとも最高権力の権利を損うことなしには最高権力の決定に反して行動することが出来ないのであるが、思考し判断すること、従ってまた言うこと、については全然これと違を異にするのである。」スピノザ『神学・政治論下』(岩波文庫) 二七六頁。表現の自由を擁護してカントはホッブズを批判している。Cf. Kant, *Über den Gemeinspruch...* (1793), Kant Werkausgabe, a. a. O. Bd. XI, S. 161 ff. なお、カントは「カントにおける外的服従と内的自由の対立をルターの國家論の影響をめぐって」Cf. Hella Mandt, *Historisch-politische Traditionselemente im politischen Denken Kants in Materialien zu Kants Rechtsphilosophie* hrsg. v. Z. Bartscha (Suhrkamp: 1976) S. 302. 内面と外面の分離に関してホッブズとルターは一致していた。Cf. R. Koselleck, a. a. O. S. 163-165.

(54) Kant, *Was ist Aufklärung*, a. a. O. S. 61.

(55) *Ibid.*, S. 59.

(56) Kant, *Metaphysik der Sitten* (1797), Kant Werkausgabe, a. a. O. Bd. VIII, S. 439.

- (65) Ibid., S. 437-8.
- (66) カントは理論的にはルソーの社会契約論をほぼ受け継いでいる。「何人も他人には服従せず、各人は全体に服従する。すなわち彼は全体の統一にともなうべき。」Kant's Handschriftlicher Nachlass (Kant's Gesammelte Schriften hg. v. Preussischen Akademie... Bd. XIX) 757f. S. 449. しかるに理論はそのまま実践には適用されない。「法は抽象的には、それが実現される手段がなくても考えることができる。しかし具体的には法の諸条件が実現される安全保障に留意せねばならぬ。」Ibid., 659f. S. 100. カントにおいては現実の絶対主義国家に対してつねにルソー的な一般意志が理念として対峙される。(67) 同上、Richard Saage, Eigentum, Staat und Gesellschaft bei Immanuel Kant (Kohlhammer: 1973) S. 50-53. を参照。
- (68) Kant, Idee... a. a. O. S. 42.
- (69) 「戦争がまったく明確で、主権的なヨーロッパの国家そのものの相互間において遂行される戦争になったということは...ヨーロッパの業績であった。それは、信仰上の独断を克服することなのであった。」カール・シュミット『大地のノモス(上)』同上、一六九頁。
- (70) Kant, Idee... a. a. O. S. 46.
- (71) Kant, Idee... a. a. O. S. 46.
- (72) Kant, Metaphysik der Sitten, a. a. O. S. 440.
- (73) Ibid., S. 441.
- (74) 「本来の敵である支配的な国家は、したがって歴史哲学的な再保険によって、敵としてはあくまでも除外されよう。」R. Koselleck, a. a. O. S. 111.
- (75) Kant, Zum Ewigen Frieden (1795), Kant Werkausgabe, a. a. O. Bd. XI, S. 245.
- (76) 「正常な状態が作りだされなければならぬし、またこの正常な状態が実際に存在するか否かを明確に決定する者こそが、主権者なのである。」カール・シュミット『政治神学』(未来社、一九七一年)二二頁。
- (77) Kant, Zum Ewigen Frieden a. a. O. S. 246. なおカントは『道徳の形而上学』では市民と旧支配者を分けて論じ、市民には新しい権力に服従する義務を与え、旧支配者には内乱を続行する権利を与えている。 Cf. Metaphysik der Sitten, a. a. O. S. 442-3.
- (78) 同上、Robert Spaemann, Kants Kritik des Widerstandsrecht in Materialien zu Kants Rechtsphilosophie, a. a. O. S. 353. を参照。「したがってカントにとって革命とは本来的に政治行動ではなくて、自然の出来事である。」Ibid., S. 350.
- (79) Kant, Streit der Fakultäten, Kant Werkausgabe, a. a. O. Bd. XI, S. 358.
- (80) Cf. ibid., S. 538-9.
- (81) Ibid., S. 358.

- (73) Ibid., S. 359. なおカントはフランスに対する反革命干渉戦争に反対する。なぜなら「他國の人民が共和化すればするほど、人民は自らへの危険に対し保護をせざるを得ざる」Ibid., S. 358.
- (74) 「政治、すなわち國家についての関心は、彼には明らかに欠けていた。」カール・フォルレンダー『マキアヴェリからレーニンまで』(創文社、一九七八年) 二二五頁。
- (75) Herder, *Ältere Niederschriften u. ausgesonderte Kapitel v. Ideen...*, Sämtliche Werke, a. a. O. Bd. XIII, S. 452.
- (76) 上記の二つについてはエントナー・ノッホーヴナ『一七八九年—フランス革命序論』(岩波書店、一九七五年) 二七頁以下を参照。
- (77) Herder, *Ältere Niederschriften...*, a. a. O. S. 452.
- (78) Herder, *Briefe zur Beförderung der Humanität, Sämtliche Werke*, a. a. O. Bd. XVIII, S. 309.
- (79) Herder, *Ältere Niederschriften...*, a. a. O. S. 454.
- (80) Ibid., S. 457.
- (81) Ibid., S. 452-3.
- (82) 革命という言葉を彼は自然の大変動という意味に用いている。Cf. Herder, *Ideen...*, a. a. O. Bd. XIII, S. 21. この点で彼は(カントともども)當時のヨーロッパの一般的な語用法にしがっている。ホルマン・ノッホーヴナ『社会哲学論集(1)』(未來社、一九六九年) 七四—七五頁を参照。
- (83) Herder, *Ältere Niederschriften...*, a. a. O. S. 455.
- (84) Herder, *Briefe...*, a. a. O. S. 317.
- (85) Ibid., S. 318.
- (86) Ibid., S. 317.
- (87) Ibid., S. 317.
- (88) Cf. Emil Adler, a. a. O. S. 35. 定評のあるカントの哲学史では、彼は反啓蒙主義者と規定されている。Cf. Johann Eduard Erdmann, *Geschichte der neueren Philosophie*, 3. Abt. Bd. (Fromman: 1931) S. 316. リカド生かれたハイザー・マートンが、その点でカントと対照があるが、彼もまたカントの相対主義を啓蒙主義とは異なるものとして見る。Cf. Isaiah Berlin, *Vico and Herder* (Viking Press: 1976) p. 210. マイク・ホムヤー・ヤッコの著作においても彼は反啓蒙主義者と分類されている。Cf. Lewis White Beck, *Early German Philosophy* (Harvard U. P.: 1969) p. 382, 392. したがってカントを啓蒙主義者とみなすエミール・アドラーは少数派に属する。彼は論議の一部分としてカントを引き合いに出すが(Emil Adler, a. a. O. S. 37) カント自身はカントを啓蒙主義者とみなすことを注意深く避けている。「啓蒙主義はカントのために方法的な武

器を提供し、そしてこれによってヘルダーは啓蒙主義を最終的に克服したのである。」エルンスト・カッシーラー『啓蒙主義の哲学』（紀伊國屋書店、一九六二年）二八七頁。

- (88) Emil Adler, a. a. O. S. 70-72.
- (89) 「フリーメイソンの支部は、絶対主義國家における新たな市民階級に特有の間接的権力組織である。」Reinhardt Koselleck, a. a. O. S. 55.
- (91) オルフェン公ルイ・フィリップの活動については、シュルジュ・ルフォーヴル『一七八九年—フランス革命序論』同上三八—九頁。またフランス革命におけるフリーメイソンの役割については、同書七〇頁を参照。また Reinhardt Koselleck a. a. O. S. 64. を参照。
- (92) 「フリーメイソンの支部は、もともとは純粋に市民階級が創り出したものであった。しかし市民たちは、社会的にはたしかに認められていたが、政治的には同じように権力を剝奪されていた貴族をそのなかに引き込み、そして社会的に同等の権利の基盤のもとで貴族と付き合うすべを心得る。」Reinhardt Koselleck, a. a. O. S. 57.
- (93) 『ヘルダーの思想』Leonard Krieger, The German Idea of Freedom (The Univ. of Chicago Press: 1972) p. 3 ff.
- (94) Cf. Leonard Krieger, a. a. O. p. 26. ヘルダーの生涯の教師であり友人であった反啓蒙主義者のハーマンが、若い頃に自由貿易論者として翻訳、論文を発表して居るのは、この点について興味深い。Cf. Josef Nadler, Johann Georg Hamann (Otto Müller: 1949) S. 62 ff.
- (95) カール・シュミット『リヴァイアサン』同上、七八、九三頁を参照。
- (96) 「フィヒテが去るのが、結局のところ両陣営にとって最もよかった。ただフィヒテのすぐれた人格の独自性を正しく評価できた者や、自由な学問的信念の権利を高く評価した者は、この致し方のない結末を同情をもって眺めたにちがいがなかった。彼はヘルダーの家では勝ち誇って小気味よげに眺められた。」Rudolf Haym, a. a. O. S. 733.